
第7章

ミッチー・ブーム、その後

森 暢平

はじめに

ミッチー・ブームとは、明仁皇太子が「平民」出身である正田美智子と「恋愛」によって結ばれたことに、大衆が歓喜した現象を指す。この現象を「大衆天皇制」と呼んだ松下圭一が強調したのは、皇室の正統性の基盤が「皇祖皇宗」から「大衆同意」に変化した点であった。皇太子夫妻が示す「幸せな家庭」というイメージが、大衆の欲望の的となったというのである。正田美智子は、ミッシヨン系の女子大卒業、海外でも通用する語学力、軽井沢に避暑ができる富裕家庭出身……と、人びとの理想対象となりえるイメージを持っており、「平民」というハンデイキャップを乗り越えて皇太子と恋愛・結婚するというシンデレラストーリーは、人びとに受けるものだっただろう。松下はさらに「今後も「お二人お揃いの初旅行」、「赤ちゃん誕生」など、つぎからつぎへとストーリーははこばれるのであつて、皇太子妃ブームといわれるものは、程度の差はあつても一回かぎりの異常反応ではない」と続ける。⁽¹⁾「大衆天皇制」論を受けてケネス・ルオフは、夫妻の息子である徳仁皇太子・秋篠宮兄弟の結婚も、松下の唱えた論を確認したと書いている。⁽²⁾すなわち、一九九〇年代の二つの結婚においても、大衆受けする「旧華族以

外」から妃が選ばれることによって、ミッチー・ブームのときと同じように、皇室と大衆との間の契約が再確認されたというのである。

だが、皇室が憧憬の対象でありえた一九五〇年代末と、「奉祝」というポーズは同じながら実質が空洞化している九〇年代との間で、大衆が持つ皇室イメージが変化していないとは考えられない。だとすると、ミッチー・ブームはいつまで続いたのだろうか。あるいは、大衆天皇制的状況はいつ転換したのであるうか。

大衆天皇制をめぐるのは、近年注目すべき業績が残されている。右田裕規は、戦前期の皇室記事の世俗化の具体例をたどりながら、ミッチー・ブームで現れた天皇／皇族をスターとして親しむ心性は、戦後突如として出現したのではなく、社会総体の大衆化と歩を合わせ戦前から展開していたことを実証的に明らかにした。^③河西秀哉もまた敗戦以降の女性皇族像の役割をたどりながら、ミッチー・ブームを敗戦後から続く過程の結節点であったと論じた。^④二人に共通するのは、大衆天皇制の始まりをミッチー・ブームに見る松下の視点の修正である。皇室像の世俗化、消費化は戦前から始まっており、ミッチー・ブームこそ、大衆天皇制的状況を転換させるものだったのではないだろうか。

前章楠谷論文は、戦前からミッチー・ブームまで、当局とマスメディアの力関係の分析を通して、「大衆天皇制」的状况に対するメディアの役割を明らかにした。本章はこの議論を受け、ミッチー・ブーム、および、「その後」を、人びとがどう見ていたのか、言い換えると、あふれるほどの美智子妃報道のなかで、人びとがどう熱狂し、どう冷静になっていったのかを検証していきたい。

一 理想の結節点としての皇太子夫妻

(1) 「新生活」と御成婚